
The guardian of red eyes

チョコラッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The guardian of red eyes

【Nコード】

N3684R

【作者名】

チヨコラッコ

【あらすじ】

この世とあの世の境目に存在するという異世界。その世界で恐れられるほどの力を有す数少ない『君魔』と言われる者達。人とは違う髪の色をした大学生『静香』。そして静香と同じ髪の色をした『君魔：凜樹』。凜樹の静香に対する只ならぬ執着心。人間界と異世界が織り成す結構エッチなファンタジックストーリー。

この小説はエッチな表現がかなり含まれます。苦手な方は避けてください。

黒緑の縛り・君臨・

「見つけた・・・。」

クックッ・・・低く喉を鳴らして嬉しそうに笑う声が闇に響く。ペロツと唇を舐め、愛おしそうに目の前の闇に浮かびあがる女を眺める。

「こいつは・・・俺のものだ。誰にも指一本触れさせやしない。」

??

?

うーっと背伸びをする。春の青空を仰ぎ見て優しく自分を照らす太陽に、静香はにつこりとほほ笑む。

今日は始業式。今日から大学生活が始まる。

「辛い受験戦争に勝ちぬいて、やっと今日から新しい生活が始まるのねっ！」

yes！静香は小さくガッツポーズをしながら、帰り途中の川の土手沿いを綺麗な長い髪を揺らし、軽やかに歩いていた。学生生活を満喫すべくわざと実家から遠い大学を選んだ。念願の一人暮らし。

「4年間頑張らなきゃ！もちろん単位はきちんと取るわ。それからバイト探して・・・恋も・・・。」

へへへっ。一人でニヤける顔を必死で直しながら、我が家へのんびりと向かう。川の土手を突き当りまで行った右側に少し古ぼけたマンションが一軒家に挟まれて立っていた。この最上階が静香が4年間住む部屋だ。なぜここを選んだかというと、大学からも近い、家賃もそこそこ、そしてこの川の土手は四季によって色んな表情を見せてくれると賃貸会社の人から教えてもらった。自然が好きな静香にとっては持って来いの物件だった。

「明日はまず・・・友達作りね！」
静香は元気にマンションへ入っていく。水の中で何かが動いていることに気づかずに。

講堂に入ると静香は真ん中の一番後ろの席に座った。少し時間が早かったせいも残り生徒がいらない。創立50年ということもあるのか、決して新しいとは言えない机と椅子。何百回、いや何千回は使用したであろう前方を埋め尽くす程の大きな黒板がこの講堂の中で大きな存在感を表していた。

「やっぱり初日は緊張するわ。」

机に両肘を乗せ顎を掌に押し当てて静香はふうふうと息をついた。徐々に生徒が講堂に集まってくる。

「隣、いい？」

後ろから女性に声をかけられる。振り向くと茶髪のクルクルした髪を一つに結んだ可愛い女子生徒と目があつた。

「あ、どうぞ。」

静香は慌てて返事をする。

女子生徒はニコツと笑って静香の右の席に座った。女性を見ている内に左側の椅子に誰かが座る気配。今度は左をみる。黒縁のめがねをかけ、いかにもがり勉風の男子生徒。男子生徒を見ていると今度は右から声がした。

「私、長谷川さち。ヨロシクね！」

「あ、私は上条静香。ヨロシク。」

「そっちのめがね君は？」

さちの言葉に少しむっとした顔で男子生徒はこっちを見る。

「・・・福地雅之。」

雅之はそう言うと二人から顔を背けた。

「福地君・・・ヨロシク。」

静香が雅之に恐る恐る挨拶をする。

「上条さんは・・・。」

「ああ、静香でいいよ。私もさちって呼ばせてね。」

「じゃあ、静香って不思議な髪の色してるのね？実は昨日静香を見かけて……。」

「これ？うん、そうなの。生まれつきなのよ、これ。」

「染めてるんじゃないの？」

「違う違う。地毛よ。」

「少しグリーン掛かったというか、金色っぽいというか……。綺麗な色ね。」

「ありがと。最近自分でも少し好きになってきたわ。昔はとっても嫌だったけど……。」

静香はれっきとした日本人だ。生まれつき髪の色が他の人と違っていた。が特別何か問題があるわけでもない。二人は教授が来ても、クスクスと笑いながら色んなことを喋る。雅之は相変わらず無愛想な顔でまっすぐ前を向いていた。

「じゃあ、さち。また明日ね。」

「うん。また明日。」

「福地君も……また明日。」

「……ああ。」

最後の授業が終わる頃には外はもう暗くなり始めていた。4月といっても日が落ちるのはまだ早い。土手は人通りが殆んどない。家は静香のマンション周辺しかないから当然だが……。

「なかなか……。怖いわね。早くこれにも慣れなくちゃ。」

そう言いながら足早に家路を急ぐ。

『ポチャン……。』

川のほうから音がしたが、静香は気にせず足を止めない。

『……。見つけたぞ……。』

「……？」

今……。何か聞こえた？静香はピタッと足を止める。

『これで……。あの方がお喜びになる……。ヒヒヒッ……。』

「な．．．なに？誰か．．．いるの？」

ポチャン．．．。川のほうで音がする。静香は視線を川へと向けた。見た瞬間、体中が震える。

「．．．な．．．何！？」

猫の目の様な目らしきものが二つ。頭には角らしきものが2本。静香をじっと見ている。逃げようとした瞬間、その物体は水から飛び出し、静香の半径2メートル内の土手へ降り立つ。この世のものでは到底有り得ない姿。長く鋭い爪をぺロっと舐め、一步一步静香に近づく。

「なんと美しい．．．。お前を持って帰れば、あの方はさぞ満足されるに違いない。」

「な．．．何なの．．．！？私．．．。」

「お前の中のそれは．．．お前が持つべきものじゃない．．．。さあ．．．。」

「何の．．．こと？嫌．．．！来ないで．．．！」

静香は一步また一步後ろに下がる。震える足でしっかり地を踏む。

「無駄だ．．．。お前は逃げられない。さあ．．．。」

私と一緒に来るんだ。そう言って目の前のそれが、静香に向かって両手を広げた。

「いつ．．．いやあ！」

「おいおい．．．。」

宙の中から第三者の声が響き、二人はピタッと動きを止める。

「誰がそいつに触れていいと言った？」

クッククク．．．。耳の中に響き渡る笑い声。静香は不意に後ろから腕を回された。

「．．．．！！！」

余りの唐突な出来事に恐怖で身動きが出来ない。

「こいつは俺のもんだ。散れ。」

耳元で低い声が目の前のものに向かい静香に言葉を投げる。一体何が起きているの？静香は硬直した全身を更に硬直させ、一生懸命

思考回路を巡らせる。

「そいつはあの方への手土産だ・・・邪魔するな。」

「おいおい、手土産だと？下衆が！俺が誰だかわかって言ってるのか？・・・下衆には俺が誰かも分からんか・・・。」

「何だと・・・！？」

目の前のものはじつと静香の後ろを血眼な眼球でみた。眼球が不意に大きく見開き、そのものの足が少しずつ後ろへ下がる。

「・・・お前！！」

「知ってんじゃないか。分かったら散れ。消されてしまいたくなくなれば・・・な。」

後ろから静香の頬を何かがペロツと舐める。血の気が一気に引き、体中に鳥肌が立つ。

「あの方へ・・・報告・・・する。」

目の前のものはそう言っただけで水の中へ消えていった。

「チツ。めんどくせーな。あいつが関わると。」

腕の力が少し抜けたのを感じ、静香は思いっきり相手を突き飛ばした。おっと！相手はふわっと身を守り地面に降り立つ。

「な・・・何なのよ！一体・・・。」

静香は初めて相手の姿をはっきりと見た。漆黒のオーラをまとい、黒緑の髪、吸い込まれそうな黒紫の瞳、綺麗な顔立ちの美男子。一

瞬静香は声を失い見とれたが、すぐに我に返る。

「誰！？あいつは何なの？・・・私は・・・。」

静香は足の力が抜け、地面へとへたり込む。美男子がゆっくりと近づいてくる。逃げられない！静香は目をギュッと閉じた。顎に触れたのが分かり、パツと目を開く。顎をグツと持ち上げられ、目の前で綺麗な顔がニヤツと笑った。

「お前は、俺のもんだ。誰にも渡さない。静香。」

黒緑の縛り・刻印・

静香は息を呑む。何故……。

「何故、私の名前を……。」

知っているの……？。驚きと恐怖で最後まできちんと喋れない。

「しかし……。」

男はちっ……と舌打ちをする。

「あんな下衆までがお前を嗅ぎつけるとは、面倒だな。」

じつと黒紫の瞳が静香を見つめる。気を抜くと吸い込まれてしまいそうな錯覚を起こす。人ではない。静香にもそれは分かる。でも、曇りのない透き通った瞳はどこか人間臭さを感じさせる。男は少し顔を歪め、自分の唇をグツと噛み締めた。そこから赤い血がにじみ出る。

「あ……血が……。」

口を開いた静香の顎をグツと男は引き寄せ、自分の唇と重ね合わせた。

「ん……っ!!」

いきなりの接吻。静香は離れようとがくが、男の力は強く体がビクとも動かない。口の中に男の舌が滑り込んでくる。否応もなく静香は口の中で男に捕まる。口の中が一気に血の味で一杯になった。血の味と同時に、静香の頭の中で何かが流れ込んでくる。流れ込んでくる何かと、口の中で優しく自分を捕まえて離さない感覚で体の力が抜けていくのが静香には分かった。次第に血の味が薄れていき、男の唇は静香をそつと解放する。

「はあっ……こんなこと……。」

静香の目から涙が溢れた。まだ会って間もない、しかも人間ではないこんな男に……。悔しさと悲しさで涙が止まらない。

「俺の名は？」

顎を掴んだまま、じつと静香を見つめ男は静香に問う。

「あなたの・・・名前？」

「言え。俺の名を。」

「あなたの名前は・・・。」

自然と口から何かが出てくる。

「あなたの名前は・・・凜樹。」

ニヤツと男は笑う。

「それでいい。」

男は静香から手を離す。静香に背を向け、低い綺麗な声で言った。

「覚えておけ。お前は俺のものだ。俺はお前を誰にも渡さない。」

そう言つて夜の暗闇と同化し、音も立てず静香の前から姿を消した。

静香は力の入らない震える足で立ち、家に向かってフラフラと歩く。家に着いたとたん、玄関にしゃがみ込み声を殺しながら泣いた。
「何が・・・どうなってるの？」

私はただの人間なのにどうしてあんな奴らに・・・怖い・・・！
恐怖で泣くことしかできない。それに・・・。

「初めてのキス・・・だったのに。」

泣きながら手を口元に当てる。まだ感触が残っている。力強く自分を引き寄せる力、優しく絡ませる舌。怖くて仕方なかったのに、あの瞬間だけは・・・。静香はギュツと目を閉じた。

次の日、泣きつかれそのまま眠ってしまったせいか、目が腫れていた。

「こんなんじゃ、学校に行けないじゃない・・・。」

鏡に映る自分に恨み言を言いながら、昨日の出来事を思い出す。

「それどころか、私・・・これからどうなるの？」

またジワつと涙が込み上げてくる。こんなはずじゃなかったのに。静香はベッドの中に潜り込んだ。

「あんな妖怪みたいな物に襲われて・・・初対面の男にはファーストキスを奪われて・・・最悪！」

なんて言っただけ。あの男。

「・・・凜樹。そう、凜樹！バカヤローっ！私のファーストキスを返せ！」

「呼んだか？俺を。」

突然の返答に布団を跳ね上げ、静香は体を起こす。昨日の男の声。でも姿が見えない。

「何？何なの！？どこに・・・いるの？」

クツクツク・・・。可笑しそうに笑う声。

「俺の名を呼べば、お前がどこに居ろうと俺には聞こえる。」

「何が・・・したいの？」

「言っただろう。お前は俺のものだ。」

「だからって・・・。」

「厄介だが、お前の魅力は相当なものだ。既にお前は、昨日のような奴らに目をつけられた。」

「魅力？私・・・そんなものないわよ！」

「お前は知らなくても、奴らには関係ないんだよ。お前を手に入れる為に、これからもお前は狙われる。」

「狙われるって・・・。」

「だから、お前には俺のものだという刻印を入れた。」

「刻印・・・？」

「これで少しはマシだろう。昨日のような下衆に狙われることはない。厄介なのは・・・。」

状況が飲み込めず、静香は混乱する。

「厄介なのはあいつらだ・・・。ちっ・・・気に食わん！」

凜樹は不機嫌な声で舌打ちをする。

「私が一体・・・何があるの？」

「その髪だ。」

「髪？これが・・・何？」

「その髪の色。それが印だ。あいつらがほしがる物をお前が持っているという・・・。」

俺はそんなものはいらんが・・・。凜樹はクツクツク・・・っと小さ

く笑う。

「いい機会だ。俺の物に手を出したらどうなるか……。思い知らせてやる。」

笑いを含んだ、でもゾツとするほど冷たい声。今、凜樹がどんな目をしているのか、静香は想像し息を呑む。

「で……。でも、キスしたくらいで私はあなたの物なんか……。」

「キス？ああ、昨日の奴か。あんなものはキスでもなんでもない。」

静香は怒りと恥ずかしさで顔を真っ赤にする。

「初めてだったのに！許さないわよ！」

叫びにも似た声で宙に向かって静香は言った。

「だったら俺が言うキスとはどういうものか。その口で、体で教えてやろうか？」

静香は凜樹の言葉に更に顔を赤らめる。

「けっ……。結構です！冗談じゃないわ！」

今の静香をどこかで見ているかのように、凜樹は楽しそうに喉を鳴らして笑う。

「言っただろう。お前は俺のものだと。」

「……。」

何度も聞いた台詞。どうして凜樹はこんなにも私に執着するのか。ふとそんなことを考える。それを見透かしてかどうか、凜樹は言った。

「いつかは俺が、お前のすべてを奪うさ。静香。あの日から俺はずっと待っていたんだからな。」

黒緑の縛り - 襲来 -

「誰か助けて……。」

怖い。たくさんの方が僕を追いかけてくるんだ。今まで優しくったおじさんやおばさんまで……。

「僕は何もしてないよ……。誰か助けて……。」

小さな男の子が道の端でしゃがみ込んで泣いている。近寄る影が一つ。

「どうしたの？何で泣いてるの？」

涙でよく見えない瞳を声のするほうへ向ける。女の子……。

「わかんない……。何で追いかけられるのか、僕にも分からないんだ。」

女の子はニコツと笑い、男の子に手を差し伸べる。

「私が一緒にいてあげる。行きましょ。」

ねっ！逆光ではっきりと顔が見えない。でも、その手を掴みたい。手を伸ばす。手が触れる。そして二人で走り出す。

???

うつすらと目を開き、寝ころんだまま額に手を当てる。フウっと小さく息をつく。

「夢か……。」

凜樹はうつすらと笑みを浮かべる。決して見たくない夢ではない。むしろいつまでも見続けていたい程、心地よい夢。夢の中では逆光で相手の顔は見えなかった。が、凜樹にはそれが誰だかはっきりとわかる。

「やっと……やっと見つけたんだ。」

もう逃しやしない、見失うことなど絶対にない。

「俺が……絶対に守ってやる。」

何があるうとも。たとえ、あの力が解き放たれる日が来たとしても。凜樹は暗闇に向かい一回指を鳴らす。

「ここまでの年月をお前がくれたんだ。お前のためにそれが終焉になろうとも……。」

俺は構わない。目の前に一つの映像が浮かぶ。待ち焦がれた女の姿を……。

あれから……得体の知れないものに襲われてから、2週間が経つ。静香は机におでこをくつつけ、うーっと唸る。凜儒が言うように2週間の間、特に何も変わったことは起きていない。でも……。「こんなんじゃ、サークルにも入れないし、バイトも出来やしない……。」

「えっ？静香、何か言った？」

「あ、さち。何でもないの。」

「ここのところ、何かちよつと変だよ？それに……。」

さちは少し高めに束ねた静香の髪をちらつと見る。

「急に髪の毛、伸びなかった？」

「きつ……気のせいよ。」

「そう？まあ、別にいいんだけど。」

さちは英語のテキストを片手に福地のもとへ走っていく。

「最近、あの二人、妙に仲がいいのよね。」

肘を突いて静香は並んで座る福地とさちを横目で見た。

「……なんか、羨ましいなあ。」

そう言つて時計を見る。授業開始まであと15分。

「トイレに行こうつと。」

そう言つて静香は席を立ち、トイレへと歩いていく。ドアを開けると誰もいない。トイレを済ませて手を洗う。蛇口の前の鏡に映る自分の髪の毛をじつと見た。さちが言つたとおり、最近髪の毛が異様に早く伸びている気がする。指で束ねた髪をくるつと巻いてみる。その瞬間。ゾクツと寒気がするような視線。

「な、何!?」

誰がいる！静香は気配を感じ、体を硬直させる。

「・・・誰!?」

「ほほう・・・。」

透き通るような、でも冷たい声。

「あいつの言った通り、確かに素晴らしい。しかし・・・。」

くくっ・・・。愉快げに笑う声。

「あいつらが近づけないのも・・・無理はないか・・・。その刻印、奴のものだな。」

「誰なのよ・・・一体・・・。」

そう言った静香のまわりの空間が一瞬に闇へと変わる。床さえ見分けがつかない。きよろきよろと見渡す静香の瞳に赤い陽炎のようなものが映る。その陽炎の真ん中に美しい男が一人。

「・・・あなた・・・誰？」

「直に見ると・・・本当に美しい。」

うつすらと目を細め、嬉しそうに笑う。

「長年求めた・・・。そなたの、力。」

ほしい・・・。男はまっすぐ静香を見つめる。いや、静香の中の何かを・・・。

「だが・・・。」

男は少し眉間にシワを寄せた。

「奴の刻印は・・・邪魔だ。」

「・・・私・・・。」

「その血をまずは消さねばな。」

そう言っただけで静香に向かい、手をかざす。それと同時に静香は頬に痛みを感じる。痛みを感じた部分に手をやる。

「・・・血・・・っ!?」

何が起こったの？でも・・・このままじゃ殺されちゃう！どうしたら・・・。怖くて動けない。男は更に手をかざす。肩、腕にも痛みが走る。宙を切る見えない刃が次々と静香を襲う。

「・・・痛・・・いつ。」

自分を襲う痛みに、静香は震える手を口元へ持っていく。指が唇に触れたとき、ハツとする。脳裏に浮かぶのは一つ。更に刃が静香に襲い掛かってくる。

「凜・・・凜儒！」

そう言った瞬間、静香の体を何かが包む。暖かい、優しい、見えな
い何か。

「困るな・・・黒蝶。俺の物に傷をつけられちゃ。」

「・・・凜儒？」

静香の前に立ちふさがるように、凜樹が姿を現す。

「久しぶりだねえ、凜樹。」

くつくつ・・・と黒蝶と呼ばれた男は綺麗な低い声で笑う。

「俺は別にお前となんざ、会いたくもないが・・・。」

そう言つて凜樹は静香の体の傷を見る。頬、肩、腕・・・静香を目で舐めるように。

「黒蝶、こいつは俺のもんなんだよ。」

不機嫌そうに凜樹は黒蝶に言う。

「確かに・・・貴方の刻印が彼女の中に刻まれている。しかし・・・」

黒蝶はニヤツと笑う。

「私には関係ありません。ほしいものは手に入れる。それが私のやり方ですから。」

「お前は昔からそうだったな。ただ、残念だ。いくらお前でも、こいつはお前のものにはならないさ。」

「それは・・・どうでしょうか？」

「さあな。なんなら、今からでも力づくで奪ってみるか？」

凜樹もニヤツと笑い、黒蝶を見る。二人の間に一瞬沈黙が流れる。

「いや、今日はやめておきましょう。」

黒蝶は視線を静香へ移し、微笑む。

「しかし、近いうちに貴女を必ず私のものにしますよ。」

今日はこれで……。そう言つて黒蝶は、二人の前から姿を消した。空間が闇から、いつの間にか静香の部屋に変わる。

「あ……あれ？ここは……。」

「おい！」

凜樹が苛立つた声で静香に怒鳴る。

「何故、すぐ俺を呼ばない！」

「そんな……こと……。」

言つたつて……。凜樹の顔を見て、静香の目から涙が溢れる。怒鳴られたからじゃない。恐怖で怖かったことと、凜樹が本当に助けに来てくれた安堵がごちゃ混ぜになつて静香にもどちらの涙なのか分からない。凜樹は静香の傷口を見て、ちっ！と舌打ちをする。髪の色が更に深い黒緑へと変化する。

「俺の刻印を解く為とは言え……。気に食わない。」

静香はいきなりベッドへ押し倒される。目の前に凜樹の顔。凜樹はまた自分の唇を噛み締める。あの時と同じようににじみ出てくる血。凜樹の唇が静香の唇のすぐ近くで止まる。静香はまっすぐに自分を見る。凜樹の目を見た。

「今日は、この前のようにはいかない……。じっくりお前の中に俺を刻み込んでやる……。」

そう言つた唇が優しく静香の唇と重なつた。同時に優しく顔を包み込み。凜樹の手の温もりを感じた。

「……んっ……ん！」

口の中で広がる血の味が薄れてしまふくらい、ねつとりと、強く絡んでくる舌。そうかと思えば、息が出来ないくらい激しく絡ませってくる。悲しくない、でも静香の目から涙がでる。凜樹は1度口を離し、静香の涙をペロツと舐める。静香の顔を見つめ、顎を少し上に持ち上げて、更に唇を重ねる。今度は激しく……。

「ん……ふうっ……んんっ……！」

時折開く口の隙間から、静香の吐息がこぼれる。やがてゆっくりと凜樹は唇を離す。

「・・・はあ・・・つ。」

息を吐き、静香は涙で一杯になった目を開く。静香の瞳が凜樹の綺麗な黒紫の瞳と静かにぶつかる。

「前より、刻印は強くなったはずだ。いいか、今度何かあったらすぐに俺を呼べ。」

わかったな？命令口調の優しい声に静香は黙って頷いた。凜樹はそれを見てニヤツと笑い、体を起こし一瞬にして姿を消した。静香は息を整え、呆然と天井を見つめた。

「私・・・一体・・・。」

唇に手を触れる。先ほどの事を思い出し、体が熱くなる。

「嫌じゃ・・・なかった・・・。」

そしてまた涙が流れる。

「私・・・嫌じゃなかった・・・。」

そうして、静香は嗚咽を漏らして泣き始める。黒蝶の事など今、頭がない。ただ、凜樹の事だけを思い出しながら。

黒緑の縛り・俘虜・

小さな子供が二人。目の前に浮かぶ光景を楽しそうに眺める。黒い艶やかな髪、白い肌、闇を纏う静かな黒瞳の男。

「そうか……。なるほど……。ね。」

口元をニヤリと緩めながら何かを悟った声が小さく響く。男の周りを囲むように飛ぶ数十羽の黒い蝶。黒い粉を時より撒き散らす。手にとまった蝶に黒い冷たい瞳を注ぎ、優しくささやく。

「あの女は私のもの。必ず……。手に入れる。さあ、お前達、私の元にあの女を連れてきておくれ。」

男の言葉に反応したかのように、蝶は男の手を離れ宙高く飛び、やがて姿を消す。

「あの女が私の腕の中で私を求める……。凜樹よ……。さあ、どうするかな。お前の歪んだ顔が目には浮かぶよ。」

ククク……。可笑しげな、何とも楽しそうな笑いが黒い闇に響く。

授業が終わり、静香は足早に家へと急ぐ。ここのことろこんな状態が続いていた。夕方4時、まだこの土手も人通りがある。

「あいつらも人がいる前では、私に手出しはしないわ。」

そう言つて、土手の花々に目をやる。季節はもうすぐ夏になる。入学して色んなことをしたいと思っていた。ワクワクしていた大学生活はこんなはずじゃなかった。入学早々突然狙われて、あつという間の3ヶ月。本当はまだ状況を把握できていない。ただ、一つ分かることは私にはあいつらがほしい何かがあつて、この髪の色が関係していると言う事。

少し先の土手に目をやる。あの場所で最初に狙われ・・・凜樹と出会った。初対面から自分を俺のものと言った。結果的にあの怪物から私を助けてくれた。その後も・・・そして、2度のキス。私の中の凜樹の刻印。きつとあの凜樹の血がそうなのだろう。静香は足を止めて胸の前で手を握り締めた。体中が熱くなるのが分かる。2度目のキスを思い出す。

「どうして・・・嫌じゃなかったの？」

ふと出た言葉にハツとし、首をブンブンと振った。

「早く帰んなきゃ！」

土手をのんびりと歩く人達の中、静香は一人、また足早に歩き出す。家について鞆を置き、静香はベッドに腰掛けた。ふと窓に目をやる。外はまだ明るい。窓辺に近づき、ガラス戸をゆっくりと開ける。心地よい風が部屋中に吹き込んでくる。結んだ髪を解き風の匂いを嗅ぐようにゆっくり目を閉じた。吹き込む風が静香の綺麗な黒緑の髪の毛の一本一本の間をすり抜けなびかせる。部屋に鳴り響く携帯電話の音でハツと我に返り、鞆から携帯電話を取り出す。

「もしもし、さち？どうしたの？」

『静香？明日なんだけど、1限目と2限目、教授が急遽来れなくなつて休講だつてさ。』

「そうなんだ。じゃあ、明日はゆっくりできるわね。ありがとう。」

静香はさちが電話を切ったのを確認し、携帯電話をテーブルに置く。「休講か・・・。本当なら嬉しいんだろうけど・・・。」

静香は、はぁーと息をつく。

「今は、授業があつたほうが私はいいんだけどな・・・。」

そう言つて、窓際へ近寄り、窓を閉めようとした時だった。黒い蝶が一羽、部屋へ迷い込む。

「珍しい。この時期に黒い蝶なんて・・・。」

静香は部屋の中を飛び回る蝶に近づく。蝶も静香に近寄り、その頭上を優雅に飛ぶ。そしてゆっくりと静香の指にとまる。静香は蝶を微笑みながら見つめた。一瞬指に針を刺したような痛みが走る。

「痛っ！・・・あ・・・あれっ・・・？」

グルグルと静香の視界が回り始める。耳の奥で優しく声がする。

『さあ・・・。一緒にいきましょ。あの方が・・・お待ちかねよ。』

「な・・・に・・・？ダメっ・・・。」

蝶は静香の指から飛び立ち黒い鱗粉を静香の全身に撒き散らす。意識が薄れる。静香は小さく口を開き精一杯の小さな声で呟く。

「凜・・・樹・・・っ。」

そして静香の意識は真っ黒な闇へと引きずり込まれた。

黒蝶は目の前の静香を眺め、満足げにうつすらと笑みを浮かべる。冷たい鉄の椅子に顔をうな垂れ座り、鋭いトゲを纏う太いツルに手足を縛られた静香。

「言っただろう？お前を手に入れると・・・。」

黒蝶の声に別のツルが反応し、静香の顔を無理やり上げ、口に先端をねじ込んだ。静香の喉が動き、唇の隙間から透明の液がこぼれ始める。次第に静香の口から熱く、苦しそうな吐息が漏れ始める。

「もう少しだな・・・。さあ・・・。」

黒蝶はゆつくりと静香に近寄る。顎をグツと持ち上げ嬉しそうに静香を眺める。

「はあ・・・熱い・・・。」

目を閉じたまま、苦しそうな静香の声。黒蝶は声を漏らすその唇に自分の唇を重ね、すぐ離れる。静香から手を離し、楽しそうに笑う。

「いいだろう・・・。さあ、始めようか。」

黒蝶の言葉に今度は無数もの蝶が、凄いスピードで静香に向かって飛んでいく。その刹那、蝶は次々と静香の服を切り刻む。次第に静香の肌が露になり、やがて体を纏う衣服は形を失った。静香を縛るツルがゆつくりと静香を宙へ吊り上げ、トゲが直接肌へ食い込み、血がにじみ出る。黒蝶は愉快げに静香の姿を頭から足元まで目を細め眺め、ゆつくりと静香に近寄る。

「綺麗だ。さあ・・・お前の中のそれを・・・開放しろ。」

目の前の胸の膨らみを左手でグツと掴み、その先のピンクに丸みを帯びた乳房をペロツと舌で舐め吸い込むように口に含む。

「あっ・・・あ！」

静香の体がビクツと大きく震える。その姿を確認し、もう一つの手が静香の下へ動く。中指が次第に静香の中へ埋もれ姿を消していく。

「ああ！・・・はっ・・・んっ・・・！」

静かな暗闇の空間に、黒蝶の口元と小刻みに動く中指から漏れる湿った音と、静香が甘く喘ぐ声だけが響き渡る。

「はあっ・・・あっ・・・体が・・・熱い・・・！」

静香の声に口を離し、ニヤツと笑う。

「さすがによく効く・・・。お前は我を忘れ、俺を受け入れる・・・。」

そう言った黒蝶の中指の動きが次第に早さを増す。宙に響く音がだんだんと大きくなり、静香からなつとりとした透明の液が溢れ出す。埋もれる指を次々と伝い、下へと落ちる。落ちる液が次第に透明から緑色へ変わる。静香は相変わらず目を閉じたまま顔を赤らめ、息を荒くする。

「そろそろ・・・。」

「そいつは・・・俺のものだと言ったはずだが・・・。」

突然割り込む怒りに満ちた声と同時に、黒蝶の体が何かの力で飛ばされ宙に舞い、床に叩きつけられる。顔を歪めゆっくりと体を起こした黒蝶の視線の先に、すべてを燃えつくすような真っ赤なオーラで包まれた男。

「凜樹・・・！！！」

その腕の中には黒い布で包まれ、息を荒めた静香。

「何故・・・ここに！結界は・・・。」

「ああ、少々梃子摺ったがな。俺がこいつにかけた刻印を甘く見たようだな。」

怒りを露にした瞳で凜樹はニヤリと不気味に笑う。

「まさか・・・そんなっ！」

「だからお前は馬鹿なんだよ。お前にこいつは奪えない、そう言うただろうが。」

しかし……。腕の中の静香をチラツと見た凜樹の髪が更に濃い黒緑になり、宙へ逆立つ。

「こいつにした代償はきつちり……。返さねば……。な。」

凜樹を包む赤いオーラが一気に闇を飲み込み、辺り一面真っ赤な海へと変わる。黒い蝶が次々と飲み込まれ、姿を消していく。

「お前……。！どうして……。っ！お前にそんな力が……。！」

「可哀想だな……。お前だけだよ？俺の本当に力を知らない馬鹿は！」

「や……。やめろ！二度とその女に手を出さぬっ！だから……。。」

「うるさいよ……。さっさと消えろ。」

凜樹の怒りに満ちた言葉に、闇を飲み込んだ赤いオーラが炎と化し、黒蝶を包み燃やす。一面に響く叫び声。

「凜樹……。その女は既に闇の中へ……。引きずり込ん……。だ……。。」

それだけを言い残し、黒蝶の姿は炎の中に散っていった。辺りがまた暗闇へと戻る。静香の苦しむ吐息だけが宙に響き渡っている。

黒緑の縛り - 解放 -

手をつないで大人から逃げ回る子供。女の子は……。

“あれは……私？”

つまずいて転ぶ二人。女の子の口から血が出ている。心配そうに女の子を覗き込む男の子。

“あの男の子は……。”

追いかけてくる大人の手がそこまで来ている。

“あ……捕まっちゃう！”

男の子が女の子の口元の血を舐め、キスをする。傍から見れば可愛い光景。男の子の髪が黒紫が黒緑へと変化する。泣きそうな女の子に男の子が精一杯笑いかける。男の子が何か言ってる。

“なんて言ってるのかしら？”

耳を澄ませる。かすかに聞こえてくる。

『これで、僕は君のものだよ。いつか必ず迎えに行くから……。』

???

誰もいない暗闇。なんて居心地の悪い空間。しかしもう、この闇の主人はいない。

凜樹は腕の中の静香を見つめる。息が荒い。うつすらと額に汗がにじむ。体温がかなり上がっている。布を通してその熱さが伝わってくる。静香の体の中で何か起きている。

「まずいな……。こいつの部屋じゃ到底無理だ。」

凜樹は大きく息をつき、暗い闇を仰ぎ見た。二人の体は今いた場所から消え、別の空間へと移される。薄暗い空間。しかし、先程みたいに淀んだ空気はここにはない。うつすらと白い綺麗な光を放つ大きな木が一本。その下にあるベッドへ凜樹は静香を寝かせた。顔を

赤らめ、苦しそうに息をする静香を凜樹は悲しそうな目で見つめる。
「俺は・・・お前に呼べと言った。お前はちゃんとそれを守った。
なのに、なんだこの様は！」

ギリッと歯を食いしばる。木の光にぼんやりと照らされた静香の顔に優しく触れる。怒りと悔しさで凜樹の手は震え、ギュツと目を閉じた。ふとその手に何かが触れたのを感じ目を開く。自分の手に重なった手。熱さが伝わってくる。

「凜・・・樹・・・」

「お前・・・」

「助けて・・・くれたの・・・ね？ありがとう・・・」

苦しそうな息づかい、でも安堵でほころんだ顔で自分に礼を言う静香に凜樹はさらに怒りを覚える。自分に対しての怒り。

「遅くなっちゃった。すまなかつたな・・・」

「・・・ううん。貴方は・・・ちゃんと・・・来てくれた・・・ものの。」

「しかし・・・」

「夢を・・・見たの・・・」

「夢？」

「子供の・・・頃・・・の夢。私と・・・男の子。あれは・・・」

静香は力の入らない腕をいっぱいに伸ばし、凜樹の顔に手を触れる。

「凜樹・・・。貴方・・・だわ。」

木から緑色の葉っぱが静香の額へ落ちる。徐々に緑から黒へと変化する。その葉を凜樹はじつと見た。

「黒蝶のやつ・・・。こんな姑息な術をこいつに注ぎ込みやがって・・・。くそつたれっ！もつといたぶって消してやるんだっ！」

そんな怒りで満ちた凜樹の声が聞こえているのかどうか、意識がもうろつとする静香は口を開く。

「私が・・・貴方を・・・縛っていた・・・のね？」

うつすらと目を開き、静香は凜樹を見た。出会って見たこともない表情。ああ・・・この人は本当に私のことちゃんと想ってくれてる、

それなのに……。自然と静香の目から涙が溢れる。

「ごめんな……。さい。忘れていて……。貴方を……。知らないうちに……。縛り続けて……。」

静香の顔が哀しさで歪む。凜樹は今から起こることを考え唇をぐつと噛みしめ目を閉じた。

「静香……。俺の言うことを聞いてくれ。」

そう言つて目を開く。

「黒蝶の奴は、お前の中にある術を掛けやがった。お前の中の力を引き出す為に……。このままだとお前はその術に逃られず死にまう。」

そう言つて木に巻きついた柔らかいツルを剥ぎ取り、静香の両手に巻きつけ、ベッドに縛る。

「術を解くにはもう、これしかない……。俺は！こんなことしたくない！しかし……。お前を死なせることはもつとしたくない！だから……。術解く間だけ……。俺を憎まないでくれ……。」

ぐつと拳を握り、悔しさで歪んだ凜樹の顔が静香には見えた。目から溢れる涙をそのままに、静香は笑みを浮かべた。

「凜樹……。貴方を……。信じてる。大丈夫……。よ。私……。負けたりしないわ。それに……。二度目の……。貴方のキス……。嫌じゃ……。なかったのよ？」

今から何が起こるのか、思考回路が働かない静香にも分かった。苦痛の決断を迫られて苦しんでいる凜樹の気持ち伝わってくる。ゆっくりと凜樹の体が静香の上へと移動し、両足の間に体を滑り込ませる。

「静香……。すまない……。」

凜樹は優しくそう言つて静香にキスをし、同時にゆっくりと体を上へ引き上げ静香の中へ入っていく。

「あつ……。ああ！」

「……。っ！」

静香の体がさらに熱を持つ。余りの熱さに汗が噴き出す。ゆっくり

と二人の体が上下へ揺れ始め、静香を縛ったツルがベッドにこすれ体の揺れに併せて音を立てる。

「熱．．．いい．．．っ！嫌っ！」

静香が叫ぶ。ツルを引っ張り、体を反らす。そんな静香の体を凜樹は力強く抱きしめ、静香の中に何度も深く入り込む。苦しさの余り噛みしめた静香の唇から血がにじむ。凜樹は舌でそれを拭い、静香に優しくキスをする。静香の口がピクツと動く。

「あ．．．この．．．感じ．．．。」

何かが徐々に体の中で湧きあがってくる。頭の中で巡る記憶。あの時と同じ．．．キス。守ってやれなかった．．．。連れて行かれる男の子を見て泣きじゃくる女の子。本当はずっと前から好きだったのに、大きな木の下で男の子の手を離してしまった。何時間も何日もその木の下で泣いた。悲しくて、悔しくて。もう会えない、そう思っ。静香はうつすらと目を開ける。白く光る大きな木。ああ、この木．．．。覚えてる。

「この木．．．あの時の．．．。」

風もないのに、木の葉がザワザワと揺れ始める。そして静香の脳裏で声がする。囁くような優しい声。

『さあ．．．。私が封印した力。貴女はもう大丈夫ね．．．。』

静香の中で何かが爆発する。黄緑色の温かな光。あの時と同じ、私には何も出来ない自分と自分を憎んだあの時の木の光。怖くない．．．優しい光。

「凜樹．．．。手を、解いて．．．。」

「．．．．静．．．香？」

「そう、私はもう．．．大丈夫．．．。」

凜樹はゆつくりとツルを解く。自由になった両手を静香は凜樹の背中に回す。背中に感じた暖かな温もりを感じ、動きを止め、凜樹は静香を見る。

「止めないで．．．凜樹。貴方も一緒に解放してあげる。」

「静香．．．俺は．．．。」

「分かってる・・・凜樹・・・愛してるわ。私は・・・貴方のもの。」

静香の思わぬ言葉に凜樹は一瞬驚愕し、次第に泣きそうな顔になる。「もう、後戻り・・・できないぞ。いいのか？」

静香は優しく微笑み、回した手に力を入れる。それを合図に、再び二人の体が激しく動き出す。静香から放たれる息づかいや漏れる声、苦しみから愛おしさへ変わる。同時に二人の体を光が包み込む。「凜・・・樹っ！貴方を・・・愛してる・・・。」

「静香、お前は俺のものだ・・・。そして・・・俺は、お前のものだ・・・。」

二人を包み込む光が一気に強さを増す。次第にゆっくりと光が消え、元の空間へと戻る。ベッドに横になったまま、静香は自分を優しく抱きしめる腕の中で泣いた。そして、ゆっくりと顔を上げ凜樹を見る。

「・・・！？凜樹？その髪と瞳・・・。」

驚いた声で静香は言った。凜樹はニヤツと笑う。

「・・・まったく。お前は、俺まで解放しやがって・・・。」

黒紫の髪と黒赤の瞳。以前の凜樹と全く違う色。お陰で力が全部戻った、凜樹は深く息をつく。

「昔、ある女に恋をした。でも、俺はそいつとずっと一緒にはいられない。何故なら俺は人間じゃないからだ。しかし、どうしても何かで繋がっていたかった。俺はそいつの血を体内に取り込み、自分の力を犠牲にした。訳のわからない力よりも、俺はそいつの方が大事だった。そして、やっと見つけた。お前を・・・。」

優しい眼差しで凜樹は静香を見つめる。

「思い出したの。私・・・男の子の手を離してしまった悔しさで・・・。」

ゆっくりと木に目を移す。

「この木の下で何日も泣いたわ。その時この木が私の力を封印した。心を、私の運命を少しでも軽くする為に。この木が、私を助けてく

れたの。」

静香は胸に手を当てる。

「ここに・・・私の力がある。分かるわ、今の私には・・・。」

「お前の力をほしがる奴は黒蝶だけじゃない。」

「ええ、分かっている。感じるもの。」

「何かあったときはすぐに呼べ。」

「ふふつ。ええ・・・私は、貴方のものだから・・・。」

白夢の囈・血縁・

『ほほお……。』

氷にも似た真つ白な冷たい空間。空間の中央に真つ白に光る美しい椅子に腰かけ、白い布でその身を纏った美しい女は赤い舌を出し、長く尖った美しい爪をペロつと舐める。

『美しい……。愛おしい……。わが君……。』

女の足元にひざまずき、息を熱くし、女にも間違えそうな美しい美貌の男。

『凜樹め……。とうとう力を取り戻したようじゃな……。』

それに……。ふつくらとした唇から白い歯がチラツと見える。

『采連よ……。』

采連と呼ばれた男は、目の前に差し出された白く細い美しい足を、真つ赤な唇と長く美しい舌で愛撫する。采連の口が足の指先からふくらはぎ、太ももへと移動していく。その姿を女は楽しそうに眺める。女の真つ白な布と足の間に次第と采連の姿が消えていく。

『しかし……。あの小娘……。気に入らぬ。美しくもない上に……。』

ペロツと唇を舐める。女の下半身に埋もれた采連は歓喜の音を上始める。

『奴を魅了しおって……。許さぬ……。』

怒りにも似た声を上げる女。次第に息が熱くなり、速くなる。

『いいぞよ……。采連。遠慮はいらぬ。もっともっと激しく……。妾を求めよ。』

女を纏う布が激しく動く。ふつくらと白い豊満な胸を半分隠した布が下へと引つ張られ、すべてが露わになる。美しい采連の顔が女の上半身と布の間から姿を現し、目の前のピンク色の乳輪とその先の乳首をすべて口を含み音を立てて愛撫する。采連の体が激しく動き始め、その動きに併せ女も激しく上下へ揺さぶられる。

『そうじゃ！妾に・・・そなたの忠誠心をもつと注ぎ込むのじゃ・・・！采連！』

『ああ！わが君・・・っ！わが・・・君っ・・・』

真っ白な空間に、歓喜に満ちた采連のうめき声と二つの肌がぶつかり合う音だけが永遠と響き渡る。

???

誰か・・・いる？眠りからぼんやりと意識が戻る。

「誰・・・んっ・・・」

うつすらと感じる気配と、体を感じる甘い感覚。

「はあっ・・・凜・・・樹？」

「お前の寝込みを襲うのはこんなにも簡単なのか・・・。」

ぼんやりとぼやけた視界に自分の体を愛撫する男を確認する。黒紫の髪が胸のあたりで動いている。感覚が次第にはつきりとしたものになる。黒紫の髪が視界から消え、代わりに静香は下半身に甘い疼きを感じた。

「あっ・・・んっ・・・ああっ・・・」

凜樹の舌が静香の中に入り上下前後に動く。次第に湿った音がベツドの中に響き渡る。時々ジュッつと蜜を吸い上げる音と同時に静香の体もビクつと反応を起こす。やがて静香の体が小刻みに震えだし、ビクンつと大きく2回体を反らした。

「ああっ・・・！」

静香のその反応を確認し、凜樹は顔を出し口元を荒く拭う。ニヤツと嬉しそうに笑い、横たわった力の入らない静香の体をグツと両手で抱きしめ、自分の大きく勃起したそれを静香の中に一気に挿入する。

「ああ・・・っ・・・んっ・・・大き・・・い・・・」

「まだヒクヒクしてる・・・お前の中っ・・・」

自分を締め付ける感覚に息を荒くし、静香の奥深くへ何度も突き上

げる。静香の甘く喘ぐ唇に、時折激しくキスをし、舌を絡ませ、声を塞ぐ。挿入したまま凜樹は静香を自分の上に座らせ、下から更に奥へと突き上げた。太く大きなそれが奥の感じる部分へ侵入するその感覚に、静香が更に喘ぐ。片手で静香の腰を押え自分の動きとは逆に動かし、もう一つの手で掌から少しはみ出る白い綺麗な乳房を下からグツと優しく掴み、指でその先の尖った部分を円を描くようにゆっくりと撫でまわす。

「あっ・・・感じちゃうっ・・・凜・・・樹・・・っ・・・ダメっ・・・私・・・っ！」

「キツ・・・っ、すげえ、締め付けてくる・・・っ・・・俺も・・・っ」
だんだんと強く締め付けられる感覚に、凜樹は体を起こし静香の体をしっかりと抱きしめ、更に激しく奥深くへと突き上げる。静香は凜樹の首元に力一杯しがみついた。

「ああ・・・っ！もうっダメっ・・・イツ・・・ク・・・んっ・・・」

静香の体がビクビクツと何度も大きく痙攣する。静香はイッた拍子に自分の中の凜樹を無意識にギュツと締め付けた。凜樹は息を更に荒げ、顔を歪めた。

「静・・・香・・・っ」

そして静香の中の凜樹は何度も大きく波打った。

二人はそのままベッドに倒れ込む。早い二つの息づかいが、だんだんとゆっくりになる。凜樹の手が優しく静香の髪を撫でた。静香も目の前の男らしい胸板に顔をうずめようと目を閉じた。と・・・。

『ジリリリイイ』

けたたましい目覚ましの音で閉じかけた目をぱつと開く。しまった、昨日目覚まし切るの忘れてたわ。静香を撫でていた手がその音を消した。静香は顔を上げる。目の前の凜樹がニヤツと笑って言った。

「おはよう・・・。」

凜樹のその言葉にハツと状況を意識する。

「ちよっ・・・！凜樹っ！」

顔を真っ赤にし怒鳴る静香に、チュツつとキスをする。

「お前、全然俺を呼ばないし。それに・・・」
「フツと顔を背ける。」

「お前が俺のもんだという証拠をたまには、植え付けておかないと・・・」

不安なんだよ・・・。ぶつきらばうな口調で凜樹は言った。静香は頬を赤らめほほ笑み、凜樹の胸におでこをくつつけた。

「馬鹿ね・・・。呼ばなくても、来たらいいじゃない・・・。」

ゆっくりと顔を上げた静香は黒紫の凜樹の瞳とぶつかった。真剣な眼差し。

「本気で・・・お前を抱いたら・・・。」

「え？」

静香の体がベッドへと引き戻され、倒される。

「り・・・凜樹！？本気って・・・。」

「いや・・・何でもない。」

そう言った凜樹の表情が突然曇る。指で静香のおでこをツンっとはじき、体をゆっくり起こして後ろを見た。

「凜樹？」

どうしたの？おでこを押え、そう言おうとした静香の言葉を凜樹が遮る。

「おい、悪趣味だな。覗き見とは・・・。」

ニヤツと凜樹の口元が歪む。その言葉に反応するかのように、部屋中が物凄い突風で覆われた。静香はびっくりしたが、自分の周りだけは風が当たっていないことに気づく。

「久しいのお。凜樹。」

ゆっくりと透き通った女の声が部屋に響く。次第にその声の正体が目の前で形となって現れた。白い綺麗な髪、白い瞳。美しすぎる美貌の女性。女を取り巻くすべての色が白。

「何の用だ、白夢。」

チツと凜樹は舌打ちをする。白夢と呼ばれた女は小さく可笑しそうに笑う。

「久しい対面だというのに、相変わらず愛想がないのお。」

「別に俺はお前なんぞに会いたくもないが……。」

「つれないことを……。息子よ。」

その言葉に凜樹は更に舌打ちをし、眉間にしわを寄せる。息子!？
じゃあ……。この人は凜樹のお母さん？

静香は余りに唐突な目の前の光景と会話に言葉が出ない。

「我が息子ながら……。妾に似たのは美貌だけとは……。」

「それだけでも俺は苛々するさ。」

「口だけは昔から減らぬ……。」

白夢の視線が凜樹から静香へ注がれる。

「お前か……。凜樹を虜にした小娘は……。ほう、その力……。」

白夢の顔から笑顔が消える。代わりに白い瞳の奥で燃え上がる嫉妬の炎。

「ますます……。氣に入らぬ。」

「えっ……。」

自分に向けられた言葉にゾクツと鳥肌が立つ。

「まあいい……。今日のところは……。」

そう言つて、白夢の姿が二人の前から消える。また強い突風が吹き、声だけが宙に響く。

「楽しみじゃのう……。妾は、黒蝶のようにはいかぬぞ……。」

クスクスと少女のような笑い声を残す。フウーッと大きく息をつき、凜樹はドカツとベッドへ腰掛ける。そのまま静香を巻き込みベッドへ倒れこんだ。今度は逆に凜樹が静香の胸へ顔をうずめた。

「チツ……。疲れた……。」

静香の胸の中で凜樹は小さく呟く。静香の腕が優しく凜樹の頭ごと包み込んだ。

「あの人、凜樹の……。」

「白夢は、俺の母親だが……。殆んどあいつとは無縁で生きてきた。あいつの美貌は若い男の愛情を吸収し得ている物だ。考えるだ

けでイラつく。あんな奴が母親なんて・・・。」

静香の胸の中で吐き捨てるように凜樹が呟く。そしてすぐに静香の体が意識とは関係なくビクッと反応する。

「ちよっ・・・凜樹！」

「今日は休みだろ？仕切り直した。」

凜樹は体制を変え、静香の上に覆いかぶさる。

「今度は夢の中じゃなく、ちゃんと俺を感じろよ。」

凜樹は、ニヤツと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3684r/>

The guardian of red eyes

2011年6月13日09時48分発行